

☆復活節第2主日(4月19日)の聖書朗読☆

※主任司祭からの解説があります。

[神のいつくしみの主日]

第一朗読 (使徒たちの宣教 2章 42~47節)

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのこの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

第二朗読 (ペトロの手紙Ⅰ 1章 3~9節)

わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しほまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。

今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 20章19～31節)

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

足立教会の信徒の皆さまいかがお過ごしですか。緊急事態宣言が発令されてもうすぐ20日になりますね。聖なる三日間の儀式も復活徹夜祭の儀式も復活祭の喜びのお祝いも今年はできませんでしたね。寂しい限りですが、今はじっと耐える時なのでしょう。昔の日本キリシタンの時代の信徒の皆さんもその時をじっと耐えて待っていたのでしょうか。その時とは「晴れてみんながこぞって参集しミサを行えるその時」のことです。今は迫害の時ではありませんが、集まるには適さない時なのです。 「その時」にはぜひみんなが健康で喜びの内にミサに来れるように、今はじっと家にいましょう。

またそのためには祈りの力を信じて互いに祈りあうことも大事です。イエス様は祈るときには部屋にいて一人で祈るようにとも勧めておられます。家に祈りに適した場所を見出すことなどもいいかもしれませんね。祈りの意向をいろいろ考えて祈ること、聖人伝やいろいろな機会に祈る祈りが書いてある本などを参考にして祈ることもできますね。祈りの基本は神様との会話ですから、ご自分の言葉で神様とお話しすること、愚痴でもなんでもいいですから、神様に自分の気持ちを打ち明けることが大事なポイントです。

さて、今度の日曜日は復活節第二の主日です。副題として「神のいつくしみの主日」とも言われています。西暦二千年に時の教皇ヨハネパウロ二世によって定められました。今日の答唱詩編118に「恵み深い神に感謝せよ、そのあわれみは永遠」と歌われています。この「あわれみ」、「いつくしみ」は聖書であかしされる「神の在り方を最もよく伝える言葉」ですと言われています（聖書と典礼—4月19日号参照）。では今日の朗読箇所を見ていきましょう。

第一朗読 （使徒たちの宣教 2章42～47節）

ここではイエスが昇天され、使徒たちに聖霊を遣わされたのち、使徒たちを中心にした教会共同体があちこちに作られていきますが、その時の共同体のありさまが描かれています。ここにかかっていることは当時の教会共同体の基本的な要素でしょう。それは使徒たちの教えを聞くこと、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることでした。この形はいま私たちが参加するミサの形そのものなのです。この点で今はこれらのことが実行できませんが、できる日が来た時に、どのように今までとは違った教会共同体が生き生きとできるかが試されることでしょう。一人一人が努力しなければならない課題です。

第二朗読 （ペトロの手紙Ⅰ 1章3～9節）

この手紙では初代教会の洗礼の時に行われた説教がもとになっているといわれています。つまり今日の「洗礼準備期の講話」でしょうか。洗礼はそれを受けたものに「生き生きとした希望を与えるもの」でした。また「朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐもの」としてくださるのです。それゆえ「あなた方は心から喜んでいるのです」。私たちはどうでしょうか。生き生きとした希望を持ち続けているのでしょうか。心から喜んでこの困難な時を過ごしているのでしょうか。このような生活態度、近所とのかかわり合いが「民衆全体から好意を寄せられていた」初代教会の信徒の皆さんに倣うことなのです。

福音朗読 （ヨハネによる福音書 20章19～31節）

この個所はヨハネによる福音書の最後のところです。イエスはトマスに会って、私たちへのメッセージを伝えます。「私を見ないのに信じる人は幸いである」と。イエスは弟子たちに現れるたびに「あなたがたに平和があるように」と言われています。もちろんそれは政治的にも、社会生活的にも言われていることですが、イエスがもっと言いたかったことは「私たちの心の中に神さまとの断絶がないこと」だったのではないのでしょうか。

聖書の他の個所では「私はいつもあなた方と共に居る」と約束してください
ました。イエスが目に見える形では会うことができなくなった今日では、
イエスの心と私たちの心が一致している平和をイエスは今も望んでおられる
のです。その今はずっと続いています。

STAY HOME, SAVE LIFE !!

2020. 4. 17

カトリック足立会主任 野口重光